

Y-G 性格検査における faking の効果

田 中 富 士 夫

真偽型の人格目録では、回答者の受検態度の偏りが検査結果（回答）を歪曲させることが知られている。faking（見せかけ回答）のような意図的偽装によって回答が歪曲される可能性があるとするれば、この種の人格目録の妥当性が疑われるのも無理からぬところである。しかし、現状ではfakingが人格目録への回答をどのように歪めるかについて必ずしも十分な知見が得られているとはいえない。

本稿の主たる目的は、Y-G 性格検査を受ける際に、教示を用いてfaking(faking goodとfaking bad)させた場合、標準条件で得られる所見とどのような相違がみられるかを調べる記述的研究である。これに加えて、faking による回答歪曲を検査項目の社会的望ましさ(social desirability)次元との関連から考察することが副次的な目的であり、この機会に筆者がかつて試みたY-G 項目の社会的望ましきの尺度値を公表することが第3の目的である。

方 法

被験者は、ある女子短期大学の2年生118名である。実験は、筆者が担当していた実験心理学の時間に教室内で実習課題の1部として行なわれた。

まず、全員に対して標準手続でY-G 性格検査（辻岡，1965）を実施した。次いで、被験者を2分し、一方の群（65名）ではfaking goodの教示のもとで再度Y-Gを実施し、終了後にfaking badの教示でY-Gを実施した。他方の群（53名）は、2回目がfaking bad、3回目がfaking goodの教示でそれぞれY-Gを受けた。結局、どの群も連続して都合3回Y-Gを受けたわけである。どの場合も、予め筆者が120項目を読み上げた録音テープを用いて速度制限法で集団実施した。2回目以降は2群それぞれ別室で検査を受けた。fakingのための教示は次の通りで、各検査前に口頭で告げると同時に各自に教示用紙を渡して主旨を徹底させた。

faking goodの教示〈2回目に行なう場合〉

「(先程は、ありのままの自分の性質を答えてもらいましたが)、今度は、社会的にみて望ましいと思う性質を答えてもらいます。つまり、今度は、他人から『よい印象をもたれるように』、『自分が望ましい性質をもっているつもりで』答えて下さい。そのほかは、先程と同じやり方です」

faking bad の教示〈2 回目に行なう場合〉

「(先程は、ありのままの自分の性質を答えてもらいましたが)、今度は、社会的にみて望ましくないと思う性質を答えてもらいます。つまり、今度は、他人から『悪い印象をもたれるように』、『自分が望ましくない性質をもっているつもりで』答えて下さい。そのほかは、先程と同じやり方です」

結 果

1. 尺度スコアから見た faking 効果

標準条件, faking good 条件及び faking bad 条件のもとで得られた各尺度のスコアの平均値と標準偏差を示したのが第1表である。faking good 条件とfaking bad 条件いずれを先行させても尺度間に有意差が認められなかったため、ここでは全員 118 名の結果をまとめて表示した。第1表によれば、faking good 条件下では、Ag 尺度と T 尺度を除く 10 尺

第1表 3条件下における各尺度の平均と標準偏差並びに標準条件とfaking条件との相関 (N=118)

尺 度		D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S
標準条件	M	11.65	10.33	10.14	10.36	9.17	8.71	10.30	10.35	11.69	10.20	8.55	12.71
	S D	4.94	4.75	5.24	4.62	3.90	4.14	3.98	4.34	4.50	4.22	5.05	5.00
faking good	M	1.90**	1.36**	1.75**	1.99**	3.76**	2.68**	9.64	19.20**	8.09**	9.70	17.70**	18.36**
	S D	2.90	2.03	2.11	2.42	3.10	2.76	3.40	1.37	2.83	2.82	2.10	1.76
faking bad	M	18.24**	18.22**	17.24**	17.77**	16.02**	18.18**	11.60**	1.24**	12.56	9.82	3.31**	2.53*
	S D	2.88	2.55	3.50	3.12	3.39	2.53	3.31	2.00	3.25	2.65	2.98	2.97
標準:good	r	.102	.049	.195*	.215*	.508**	.418**	.081	.145	.146	.214*	.058	.104
標準:bad	r	-.140	-.059	-.093	.071	-.313**	-.150	-.082	-.040	.012	-.213	-.167	-.100

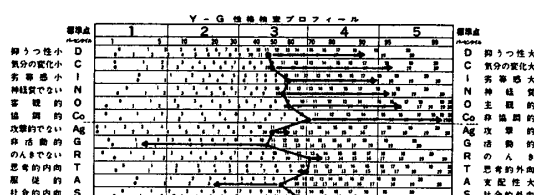
* $p < .05$ ** $p < .01$ はそれぞれ標準条件との有意差または有意相関を示す

度で標準条件との間に有意な差異が認められる。とくに、情緒安定性に関与する尺度 D、C、I、N が揃って安定側へ大幅に変化することがわかる。O 尺度はより客観的な方へ、Co 尺度はより協調的な方へ、G 尺度はより活動的な方へ、A 尺度は支配性の大きい方へ、また S 尺度は外向的な方向へ変化する。この傾向は、辻岡 (1965, P. 345) が価値判断状況で男子大学生から得た結果と軌を一にするものであるが、各尺度の偏りの程度は本結果の方が著しい。faking good 条件の平均プロフィールを標準条件の平均プロフィールからの変化として表わしたのが第1図である。図内の矢印は標準条件から変化する方向と位置を示している。

第1図 faking good 条件における平均プロフィール (標準条件からの変化)

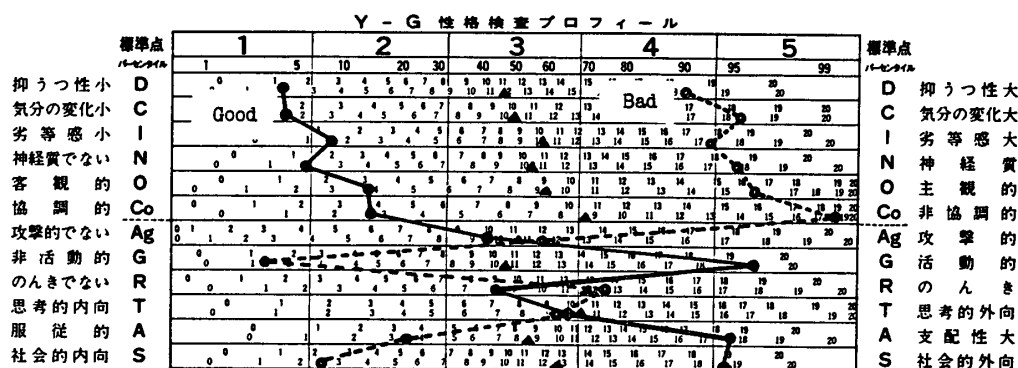


第2図 faking bad 条件における平均プロフィール (標準条件からの変化)



faking bad 条件のもとでは、R及びT 2尺度以外のすべての尺度が第2図に示されているように大幅に変化した。その変化の方向は、faking good の場合と丁度逆で、情緒的不安定化、主観化、非協調的な方向、非活動的、服従的、内向的な方向への変化である。第3図は、faking good とbad の平均プロフィールを対比させたもので、両者が鏡像的関係になっていることがわかる。この図からわかるように、faking good 条件の平均プロフィールは、いわゆる「右下がり型」(平均プロフィールはD型)であり、faking bad の平均プロ

第3図 faking good 条件と faking bad 条件の平均プロフィール (▲は標準条件)



フィールは「左下がり型」(E型)である。回答者が想定している望ましい人格像は、情緒的に安定し社会適応性が良く外向的な人であるのに反し、望ましからざる人格像は情緒的には不安定で社会適応性は良くなく内向的な人柄が考えられているようである。

このように、Y-Gの各尺度はfaking指示によって著しい変化を示すが、12尺度すべてが一様に影響を受けるわけではなく、T尺度は殆んど影響を受けず、Ag尺度はgood のとき、またR尺度はbad のとき共に余り影響を受けてない。faking効果に尺度差がみられる理由は、本結果だけではわからない。なお、第1表をみると、faking 2条件ではすべての尺度の標準偏差が標準条件よりも小さいことがわかる。これは、faking指示が回答者の受検態度を斉一化し、回答者のパースナリティの反映は最小限に抑えられるためであると解されよう。受検態度を斉一化し得るということは、回答者が想定している望ましい人格像と望ましからざる人格像がそれぞれ比較的画一的であることを物語るものである。

2. プロフィール類型からみた faking 効果

前記のように、平均プロフィールをみると、faking goodではD型、faking bad条件ではE型であったが、個々人が標準条件とfaking条件ではプロフィール類型がどのように変化しているのかは、これだけでは明らかではない。118名について3条件下で得られたプロフィール類型を調べて、標準条件とfaking good条件、並びに標準条件とfaking bad条件との対応関係を求めたのが第2表と第3表である。表では、プロフィール類型を5類に大別している。第2表に示されているように、標準条件のもとで最も多いプロフィール類型はB類（なかではB'型が過

第2表 標準条件とfaking good条件下におけるプロフィールタイプの対応（N=118）

標準条件	faking good					計
	A類	B類	C類	D類	E類	
A類			1	33		34
B類	1	1		34		36
C類				6		6
D類			1	20		21
E類	1			20		21
計	2	1	2	113	0	118

第3表 標準条件とfaking bad条件下におけるプロフィールタイプの対応（N=118）

標準条件	faking bad					計
	A類	B類	C類	D類	E類	
A類	2	5		1	26	34
B類		9			27	36
C類					6	6
D類		5			16	21
E類		3	1		17	21
計	2	22	1	1	92	118

半数を占め次いでB型が多い）であり、次いでA類（なかではA''型が過半数を占める）が続き、C類は最も少ない。ところが、faking good条件では全体の約96%に当たる回答者(113名)がD類（なかではD型が最も多く91名、D'型21名、AD型1名）のプロフィールとなり、他の類型は殆んどみられない。つまり、faking good条件では一様にD類のプロフィールに収斂してしまうわけで、標準条件でのプロフィール類型との関連はみられない。

次に第3表をみると、faking bad条件下で最も多いのはE類（なかではE型が最も多く79名、E'型12名、AE型1名）で、これに次ぐのがB類（なかではB'型が最も多く19名、B型3名）であることがわかる。faking goodの場合ほど著明ではないが、プロフィール類型にバリエーションはみられなくなり、もっぱらE類（78%）とB類（19%）に集中するのである。ここでも、標準条件のときのプロフィール類型とfaking bad条件下の類型との間に特定の対応関係を見出すことはできない。

回答者が思い描いている望ましい人格像がD類プロフィールで表わされる特徴、つまり情緒的に安定し社会適応性の良い外向者という画一的なパターンであるのに対して、望ましくない人格像は、E類プロフィールが大多数とというものの、このほかにもB類で表わされるパターンがあるという点で違いがみられる。E類とB類は、共に情緒的に不安定で社会適応性は良くないが、前者は内向者であり後者は外向者であるという違いがある。それぞれneuroticな人格像とpsychopathicな人格像に対応するとみてよいであろう。

第4表 3条件下における各項目の承認率(%)

項目 番号	faking bad	標準 条件	faking good	項目 番号	faking bad	標準 条件	faking good	項目 番号	faking bad	標準 条件	faking good
1	3	89	99	41	4	36	92	81	86	44	6
2	92	31	4	42	93	22	1	82	92	40	2
3	8	24	81	43	95	49	11	83	98	53	0
4	37	66	51	44	68	58	19	84	96	10	1
5	13	72	90	45	72	53	24	85	93	18	0
6	25	35	53	46	69	35	8	86	13	21	87
7	89	31	6	47	86	52	2	87	85	54	11
8	92	19	3	48	84	44	7	88	36	53	42
9	89	47	1	49	82	19	3	89	6	58	97
10	83	46	6	50	95	37	0	90	67	68	30
11	92	58	2	51	84	33	3	91	75	67	25
12	98	49	2	52	98	37	2	92	81	63	5
13	79	64	8	53	3	32	97	93	77	68	9
14	3	10	97	54	61	44	49	94	95	43	1
15	72	80	31	55	93	3	3	95	92	32	2
16	75	38	11	56	85	11	6	96	94	51	2
17	4	20	92	57	86	20	3	97	79	18	6
18	55	28	47	58	91	38	3	98	75	38	4
19	90	10	2	59	79	29	7	99	64	64	28
20	75	18	7	60	85	62	13	100	94	53	3
21	93	44	4	61	5	78	97	101	3	58	94
22	89	44	4	62	68	60	14	102	9	53	87
23	73	32	6	63	12	31	75	103	83	35	12
24	72	78	17	64	28	70	64	104	56	53	25
25	95	35	2	65	2	14	89	105	96	16	2
26	1	34	99	66	42	56	40	106	95	42	3
27	95	18	3	67	92	33	7	107	98	20	1
28	68	36	29	68	73	22	4	108	86	53	1
29	8	67	97	69	87	46	5	109	8	31	43
30	22	31	81	70	57	27	14	110	82	56	3
31	81	58	16	71	90	66	7	111	32	47	47
32	94	53	4	72	89	47	3	112	12	65	86
33	73	57	13	73	3	56	97	113	3	16	97
34	78	31	7	74	90	39	1	114	58	52	27
35	82	47	9	75	46	45	46	115	92	25	4
36	81	83	18	76	55	47	20	116	91	18	3
37	53	43	33	77	0	35	97	117	95	52	2
38	31	50	51	78	97	42	2	118	9	22	79
39	8	52	90	79	95	43	3	119	92	53	3
40	68	38	22	80	27	77	49	120	93	35	2

3. 項目レベルからみた faking 効果

faking good あるいはfaking bad 条件が各尺度スコアを一定方向に変化させる傾向をもつことを確かめたが、この傾向は各尺度を構成している項目のレベルでも確認できるであろうか。項目内容を自分に当てはまるとして受け入れるか否かがY-G反応であると考えれば、項目の承認率(probability of endorsement)はfaking good 条件とbad 条件とでは正反対の方向に変化することが期待できる。標準条件が両者の中間に位置すると仮定すれば、3条件における項目承認率の間には、faking bad <標準条件 <faking good またはfaking bad> 標準条件> faking good といった系統的な関係がみられる筈である。第4表は、3条件における項目承認率(「はい」応答の%)の推移を示したものである。

この表から読み取ると、fakingによって承認率が系統的に変化するのは105項目(87.5%)であって、残りの15項目では系統的な変化はみられない。ここで系統的というのは、faking good の構えをとれば標準条件よりも承認率が高くなる場合にfaking badの教示のもとでは承認率が低くなる(またはこの逆)という具合に、faking goodとfaking bad が承認率を逆方向に変化させるという意味である。faking good でもbad でも共に標準条件のときの承認率より高くなる(または低くなる)場合は系統的とはいわない。前記15項目のなかには、fakingによって承認率が変らない項目もあり、こうした変化パターンは系統的な推移に準ずる関係とみることができる。非系統的な変化、つまりfaking good でもbad でも承認率が同じ方向に変化するという関係は、その意味するところは単純ではない。このカテゴリーに入る項目は9個(項目番号: 4、15、18、24、54、64、66、80、88)であった。これらの項目の尺度を調べると、Ag 3個、R 3個、そしてT、O、Dがそれぞれ1個ずつであった。

考 察

Y-G性格検査を3条件、すなわち標準条件、faking good 条件及びfaking bad 条件で実施したところ、回答はfakingにより著しく影響を被ることが知られた。被験者全員の平均プロフィールをみると、faking good条件とfaking bad 条件とでは、各尺度スコアは丁度逆方向に変化し、前者は「右下がり型」、後者は「左下がり型」となって、両平均プロフィールは鏡像的な関係になっていた。しかし、12尺度がすべて同程度に変化するわけではなく、T尺度のように殆んど影響を被らない尺度もあれば、AgやRのように一方のfaking条件だけに有意差を示す尺度もあるなどfaking効果には尺度差がみられた。各被験者の3条件におけるプロフィール類型を個別に調べてみると、標準条件のもとでどのようなプロフィール類型を示していたかということには無関係に、faking条件ではD類が圧倒的に多く(96%)なり、faking bad条件ではE類(78%)とB類(19%)に変化することがわかった。標準条件ではB類が多いとはいえ、かなりの個人差が認められたプロフィール類型が、両

faking 条件では画一化し限られたプロフィール・パターンに収斂する傾向を示したのである。各項目の承認率の変化をみると、faking bad 条件、標準条件、faking good 条件の順に承認率が高くなる（または低くなる）といった系統的变化を示す項目が120項目中105項目（87.5%）にのぼり、両faking 条件が承認率を同一方向に変化させるといった非系統的变化がみられたのは9項目に過ぎないことがわかった。

以上のように、教示を用いてfakingを行なわせると、回答には一般に著しい影響がみられるが、影響を被る程度はY-Gの尺度により、また項目により一様ではなかった。

ここでは、まずfakingによる回答の変化を、項目の社会的望ましき (Social desirability) の要因との関連から考察し、次いでfaking効果の尺度差について吟味したい。

1. faking による項目承認率の変化と社会的望ましき

人格目録に対する承認反応(「はい」回答)の確率が、項目の社会的望ましき（以後SDと略す）の程度の単調増加関数であるとの仮説をたてた Edwards (1953) は、140項目の人格叙述項目の承認率とその項目のSD 尺度値との間に $r = .871$ という高い相関を報告している。この仮説によれば、項目が社会的に望ましければ、回答者が承認する確率は高くなり、社会的に望ましくなければ承認率は低くなる傾向があるということになる。ところで、本実験で設定したfaking good 条件とは、教示により被験者の受検態度を操作して、この傾向を強める条件であるということが出来る。これに反して、faking bad 条件はこの傾向に逆らう態度を導入していることになる。そして、項目のSD 尺度値が高い（望ましい）項目はfaking good 条件で承認率が高くなりfaking bad 条件では低くなることが期待されるのに反し、項目のSD 尺度値が低い（望ましくない）項目はfaking good 条件で承認率が低くなりfaking bad 条件では高くなる筈である。ここで「高く」あるいは「低く」というのは標準条件と比較してという意味であるから、前者の変化パターンを、bad < 標準 < good、後者を、bad > 標準 > good と表わすとすれば、両者共さきに系統的關係と名付けた変化パターンを指すことになる。この仮説を確かめるために、120項目のSD 尺度値を高さに従って24項目づつに5等分して承認率の変化パターンとの関係を調べたのが、第5表である。

第5表 項目の社会的望ましきの程度と3条件下の項目承認率の変化パターンとの関係

変化パターン SD 尺度値	系 統 的 変 化		準系統 的变化	非系統 的变化	計
	bad > 標準 > good	bad < 標準 < good			
1.39-2.04	23	0	1	0	24
2.05-2.35	24	0	0	0	24
2.36-2.70	22	0	1	1	24
2.71-3.61	10	5	3	6	24
3.62-4.46	0	21	1	2	24
計	79	26	6	9	120

この表で用いたSD 尺度値は、付録に記した手続によって筆者が別の機会に求めた値であって、尺度値が大きい程その項目が社会的に望ましいことを表わしている。なお、この表でいう非系統的变化とは、さきに項目レベルからfaking効果を調べた際に名付けた変化パターンのものであり、準系統的变化とは、いずれか一方のfaking条件における項目承認率が標準条件のそれとほぼ同じ高さの場合を指している。第5表の結果をみると、期待されたようにSD 尺度値の低い項目では、bad > 標準 > good 型の変化パターンが圧倒的であり、少なくとも尺度値2.70までの項目には逆パターンはみられない。これに対して、SD 尺度値3.62以上の高い項目では、bad < 標準 < good 型の変化が圧倒的に多くその逆のパターンはみられない。しかし、尺度値が2.71から3.61までの24項目では、両パターンが混在しており、加えて非系統的变化を示す項目数が最も多い。したがって、さきの仮説は一応支持されたといえる。ただし、SD 尺度値の高さについていえば、120項目の丁度中間にあたる24項目（SD 尺度値2.36から2.70まで）は、むしろSD が低い（望ましくない）カテゴリーにはいるとみた方がよいようであり、次の段階のSD 尺度値2.71から3.61までの項目群の方が中間的なSD の項目といえそうである。

この段階にはいる項目群において非系統的变化パターンが最も多く、非系統的变化パターンを示す9項目のうち6項目までがこの段階に入っているという関係がある。これを手がかりとして、どのような項目が系統的变化パターンを示さないのかが吟味できそうである。SD 尺度値が中間的な項目（つまり、社会的に望ましいわけでもなく、さりとて望ましくもないといえぬような項目）に対して、どのような方向（承認するか否か）に回答すれば、goodにせよbadにせよfakingすることになるのであろうか。おそらく、これは被験者にとって大変むづかしい判断を強いられる事態であろう。そのような事態では、各人の回答が揃って一方向にのみ変化するとは期待できない。各人各様の判断が入り乱れる状況では、全体としてみたとき項目の系統的变化パターンは生じないと思われる。

ところで、どの方向に答えるべきか判断が困難であれば、第3の回答として「どちらでもない」「わからない」という？回答もまた増してくるに違いない。？回答は、「はい」と「いいえ」の中間に位置する回答とみることができ、事実Y-G検査ではそのように採点しているのであるが、他方からみれば、これは判断保留ないしは判断停止を表わす反応とも解される。判断が困難になれば、判断保留が増すと仮定することができよう。この仮定を確かめるために、さきと同様に項目のSD 尺度値の高さに従って120項目を5等分し、3条件それぞれの？回答率の平均を求めたのが、第6表である。この表によれば、標準条件ではSD 尺度値2.74-3.61までの中間段階の項目群の？回答率の平均は最も低いにも拘らず、faking good 条件ではこの項目群の？回答が最高であり、faking bad条件でも同様なことがいえる。しかし、この段階の項目では標準条件よりも？回答が増えるとはいえない。全体としてみれば、両faking条件の？回答率は標準条件のそれよりかなり低くなるのであ

第6表 項目の社会的望ましさの程度と3条件下で現われる?回答率の平均と標準偏差

S D 尺度値	標準条件		faking good		faking bad	
	平均	標準偏差	平均	標準偏差	平均	標準偏差
1.39-2.04	15.50	5.55	3.71	2.40	3.83	3.27
2.05-2.35	16.42	4.10	5.58	3.91	5.17	3.84
2.36-2.70	16.21	6.63	11.25	7.00	8.71	4.79
2.71-3.61	14.75	5.90	15.29	7.30	12.04	5.54
3.62-4.46	20.04	9.08	7.04	7.04	5.88	4.92
計	16.58	6.61	8.58	7.21	7.13	5.35

るから、標準条件よりも高くないとしても、中間的なSD 尺度値をもつ項目の?回答率がfaking条件下では他段階の?回答率よりも相対的にみて高いことは確かであって、さきの仮定はある程度認めてよいであろう。この点をさらに確かめるために、非系統的变化パターンを示す項目群の3条件下における?回答率を調べて、系統的变化パターンを示す項目群のそれと比較したのが、第7表である。表から明らかなように、両faking条件ともに非系統的变化パターン項目群の平均?回答率は系統的变化パターン項目群のそれよりも

第7表 項目承認率が系統的に変化する項目群と非系統的变化を示す項目群の3条件下における?回答率の平均と標準偏差

群	条件		標準条件	faking good	faking bad
	平均	標準偏差			
非系統的変化 (N=9)	平均		15.11	18.89	15.33
	標準偏差		8.98	6.64	6.06
系統的変化 (N=105)	平均		17.06	7.27	6.25
	標準偏差		6.31	6.20	4.64

高い。系統的变化パターン項目群の場合は、両faking条件の方が標準条件よりも?回答率が低いのに反し、非系統的变化パターンを示す項目群では逆にfaking条件(とくに faking good)の?回答の方が標準条件よりも高いことがわかる。これらの事実から、承認率が系統的变化を示さない項目というのは、faking条件下でどのように答えるべきかの判断が困難な項目であると解することができよう。

2. faking 効果の尺度差

さきに、第1表でみられたように、一般的にいえば各尺度スコアは標準条件とfaking条件とで著しい差違を示すのであるが、なかにはT尺度(思考的内向性)のように殆んど変化しない尺度もあり、また項目レベルでみてもその承認率変化パターンに尺度差がみられたのである。Y-G尺度で表わされる人格次元のなかには、SD 要因が回答に大きく影響する次元とあまり影響を及ぼさない次元とがあるかも知れない。つまり、思考的内向性の

ような人格次元は、SD 要因の影響を被らない次元であると仮定できる。もしも、この種の仮定が成立つとすれば、Edwards らが仮定している項目の承認率とSD 尺度値との間の相関関係は、それぞれの人格次元によって異なってくる筈である。いま、尺度毎に項目の承認率（標準条件）とSD 尺度値との間の相関をスピアマンの順位相関係数により算出すると、第8表のように尺度毎に異なり、-.588から+.764に至るまで実に様々であって、

第8表 尺度別にみた項目承認率とSD尺度値間の順位相関係数

尺度	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S	中央値
r_s	.764	.170	-.588	.418	.688	.388	.073	-.139	.655	.000	-.321	.594	.279

その中央値は $r_s = .279$ である。両faking条件において変化のみられなかったT尺度が $r_s = .000$ であることは、faking good で有意差のみられなかったAg尺度が $r_s = .073$ である事実と共に、さきのような仮定を支持するかのようにみえる。しかし、faking badで有意差のみられなかったR尺度が $r_s = .655$ であることや、両faking条件で最大の差がみられたC尺度が $r_s = .170$ でしかないこと、さらに尺度I、G、Aでは負相関になる事実を説明するには、SD 要因の寄与の程度が人格次元（尺度）により異なるという仮定だけでは不十分である。Y-G120項目のSD尺度値の分布状況を尺度毎に調べると第9表の通りである。すなわち、10項目のSD 尺度値の高さと分布範囲は尺度毎にかなり異なっている。例えば、

第9表 Y-Gの尺度別にみた項目のSD尺度値の分布とその中央値

<div style="display: inline-block; transform: rotate(-45deg);"> 尺度 SD尺度値の 中央値 SD尺度値 </div>	D	C	I	N	O	Co	Ag	G	R	T	A	S	計
	2.38	2.40	1.97	2.08	2.26	2.35	3.04	4.05	2.69	3.57	2.62	2.96	
1.39-2.04	1	2	6	5	4	3	1		2				24
2.05-2.35	4	2	2	3	1	2	1			2	4	3	24
2.36-2.70	2	6	1	2	2	4			4	1	1	1	24
2.71-3.61	3				2	1	6		3	3	4	2	24
3.62-4.46			1		1		2	10	1	4	1	4	24
計	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	120

G尺度は10項目共SD 尺度値の最高段階に集中しているのに対して、N尺度はSD尺度値の低い段階の方に偏っており、O尺度はすべての段階に広く分布しているといった具合である。したがって、これらの条件を無視して第8表で求めた r_s の高さを尺度間で比較してもあまり意味はない。このように、Y-G検査各尺度の項目構成はSD 尺度値に関していえば、コンパラブルではない。それ故、Y-G尺度で示される人格次元に対して一様にSD 要因が関与するわけではないと仮定してみたところで、この種の相関関係からは直接検証することができない。将来、項目の叙述を改変し、12尺度についてSD 尺度値の分布範囲を揃えることができれば、この種の相関関係を吟味することも意味をもってくるであ

ろう。しかし、12尺度がSD 尺度値に関して等価でありながら、しかも現行のY-Gと同じ尺度内構造と尺度間構造を備えたformを作ることは至難と思われる。

要 約

女子大学生118名に対して、Y-G性格検査を標準条件、faking good 条件及び faking bad条件の3条件で実施し、教示によるfaking が回答にどのような影響を及ぼすかを調べた。

結果は、(1)尺度スコアの平均値と平均プロフィールの変化、(2)個人別のプロフィール類型の変化、(3)項目の承認率の変化の諸側面から分析した。

平均プロフィールは、faking good 条件のときD型となり、faking bad 条件ではE型となった。fakingによる尺度スコアは、T尺度及びR尺度(faking badのとき)、Ag尺度(faking goodのとき)を除き著しく変化し、概していえばfaking badとfaking good は逆方向に変化した。

プロフィール類型の変化を個人別にみると、faking good条件ではD類、faking bad 条件ではE類とB類に変化する画一的な傾向が著しく、その変化パターンは標準条件時のプロフィール類型とは何ら関連が認められなかった。

項目レベルでみると、faking効果は大抵の項目承認率を、bad 条件<標準条件<good条件またはこの逆関係のように系統的に変化させた。

以上のようなfaking効果を、Edwardsらの仮説にしたがって項目の社会的望ましき要因との関連から考察した。一般にいて、社会的に望ましい叙述内容の項目の承認率が faking good条件で高くなりfaking bad 条件で低くなること、また社会的に望ましくない場合はこの逆の関係がみられることを確かめた。中間的なSD 尺度値をもつ項目は、faking 事態でどのように回答すべきかの判断が難しいために系統的な変化パターンが生じなくなるといふ仮定をたて、判断の困難度を表わす指標として7回答率を用いて検討し、この仮定を支持する結果が得られた。

faking効果に尺度差がみられることから、SD 要因が回答に寄与する程度は人格次元(尺度)により異なり、一様ではないと仮定したが、この仮定を直接確かめることは困難であると考えられた。

なお、大学生46名を評定者としてY-G項目のSD 尺度値を求めた結果を付録として提示し、併せて従来の諸結果とも比較した。

《付録》

Y－G性格検査項目の社会的望ましさの評定

考察の項で引用したY－G項目の社会的望ましさの評定値は、筆者の未発表資料(1962)に基づくものである。この機会に、その手続、他研究者の結果との比較及び項目承認率との相関関係等を報告する。

(方法) 評定者は、金沢大学の教養部1年生で1962年に筆者が担当していた心理学を聴講していた46名(男子31名、女子15名)である。

評定の作業は教室内で集団的に行なわれた。評定者には、Y－G項目120項目とMMP IのK尺度30項目を印刷した評定紙が配布された。評定者に求められたのは、各項目を読んで、そのような特性が社会的にみて望ましいか否かという観点から5段階に評定することであった。評定値は、「最も望ましい」特性を5、「望ましい」特性を4、「全く中間」を3、「望ましくない」を2、「最も望ましくない」を1とし、用紙には各項目毎にそれぞれこの5段階が印刷されており、評定者はこのうち各自の評定値にふさわしい1つを選ぶという手続がとられた。

(結果) 全員の評定値の平均値と標準偏差をY－G120項目について求めた結果が、第10表である。評定値の平均は、1.39から4.46の範囲にわたっており、その平均は2.73である。この平均値を社会的望ましさの尺度値とみなして、大石(1964)の報告している女子の結果(ただし、大石の場合は9段階評定の中央値を尺度値としている。評定者は30名)との積率相関を求めると、 $r = .930$ であった。評定者の性別、評定段階数、尺度値の求め方等の相違にも拘らず両結果には極めて高い相関が認められ、この種の方法で求めた項目の社会的望ましさの評定値が安定したものであるといえそうである。

しかし、筆者が120項目から得た評定値の標準偏差と大石の四分偏差との相関を求めると、 $r = .304$ に過ぎず、評定値の散布度では両者間に一致した傾向を認めることはできない。

Edwards (1953)は、人格目録の項目の承認率が、その項目の社会的望ましさの評定値と高い相関があることから、真偽型人格目録に対する反応が項目の社会的望ましさの程度に大きく左右されるという仮説を提出した。彼自身は、EPPSの140項目の承認率と社会的望ましさの尺度値との間に $r = .871$ の積率相関が得られたと報告しており、その後様々な人格目録について行なわれた多くの研究は、概していえばEdwardsの結果を確認している。しかし、わが国におけるY－G項目の場合は必ずしも一致した結果が得られていないように思われる。大石(1964)では、男性群 $r = .30$ 、女性群 $r = .56$ であり、岩脇ら(1966)では男子で $r = .75$ 、女子で $r = .65$ の値を得ている。筆者が、本結果を得た当時(1962)金沢大学の全学生から無作為に抽出した標本200名(男子166名、女子34名)に基いて求め

第10表 Y-G性格検査項目の社会的望ましさの評定値の平均と標準偏差(s)

項目 番号	平均	s	項目 番号	平均	s	項目 番号	平均	s
1	4.00	.70	41	3.98	.91	81	2.15	.67
2	2.07	.65	42	2.13	.69	82	1.85	.73
3	3.65	.90	43	2.04	.70	83	1.98	.58
4	3.30	.83	44	3.07	.83	84	1.83	.49
5	3.83	.71	45	2.43	.65	85	2.11	.82
6	2.85	.70	46	2.37	.64	86	3.65	.97
7	2.49	.82	47	2.26	.65	87	2.07	.65
8	1.85	.70	48	2.22	.70	88	2.65	.85
9	2.00	.76	49	2.24	.74	89	3.93	.83
10	2.00	.67	50	2.07	.74	90	2.93	.83
11	2.54	.86	51	2.57	.72	91	3.15	.63
12	2.15	.85	52	1.74	.80	92	2.58	.84
13	2.89	.88	53	4.33	.70	93	2.35	.85
14	3.07	.74	54	3.01	.78	94	1.78	.63
15	3.52	.72	55	2.04	.56	95	2.41	.88
16	2.70	.81	56	2.37	.80	96	2.48	.94
17	3.91	.99	57	1.93	.61	97	2.47	.69
18	3.70	1.03	58	1.72	.69	98	2.50	.75
19	2.09	.66	59	2.39	.74	99	3.61	.61
20	2.00	.67	60	2.96	.85	100	1.93	.74
21	2.48	.69	61	3.78	.89	101	4.11	.64
22	1.93	.68	62	2.74	.85	102	3.80	.75
23	2.57	.58	63	3.80	.91	103	2.70	.79
24	2.93	.68	64	3.48	.81	104	3.28	.89
25	2.15	.73	65	3.89	.77	105	1.89	.71
26	3.02	.75	66	3.22	.81	106	1.83	.68
27	2.13	.65	67	2.33	.79	107	1.39	.54
28	2.63	.68	68	2.00	.56	108	2.96	.67
29	4.13	.62	69	1.87	.58	109	4.09	.76
30	3.54	1.11	70	2.13	.75	110	2.30	.66
31	2.63	.83	71	2.30	.81	111	3.72	.89
32	2.15	.73	72	2.17	.71	112	3.76	.57
33	2.24	.85	73	4.13	.69	113	4.28	.81
34	2.11	.60	74	2.09	.55	114	3.07	.69
35	2.54	.98	75	3.52	.75	115	2.37	.64
36	2.54	.87	76	2.67	.84	116	1.98	.58
37	3.02	.75	77	4.46	.55	117	1.91	.76
38	2.93	.71	78	1.91	.76	118	3.87	.75
39	3.87	.83	79	2.00	.82	119	2.61	.86
40	2.96	.79	80	3.67	.63	120	2.28	.66

た承認率と前記の社会的望ましきの評定値との間の相関を求めたところ、 $r = .218$ という低い値を得ている（田中，1977）なお、なお、MMPI のK尺度では $r = .232$ であった。

本稿で用いられた女子学生118名の標準条件での回答から承認率を求めて、筆者の社会的望ましき評定値との相関を求めたところ、 $r = .266$ であった。かつて得られた低い相関を確認したわけである。

ところで、本稿でとり上げたfaking条件下における項目の承認率と社会的望ましき評定値との相関を調べてみると、faking good 条件では $r = .888$ 、faking bad 条件では $r = -.896$ という極めて高い値が得られた。標準条件では、この中間にあたる $r = .266$ であったことを考え併せると、教示内容で規定される回答者の受検態度の相違が相関の高さに敏感に反映していることがわかる。この事実は、Y-Gの場合にみられた諸結果の不一致が項目承認率の違い、つまり被検者の受検態度の違いから生じている可能性を示唆しているように思われる。

また、この事実を逆に利用すれば、項目の社会的望ましきの要因が関与しないような受検態度を「教示内容」の操作によって作り上げることが可能ではなかろうかとも考えられる。これが可能であるとすれば、将来において、社会的望ましき要因の介入を除く1つの技法として、教示内容を変更していくという道が開けてくるかも知れない。

引用文献

- Edwards, A.L. 1953 The relationship between the judged desirability of a trait and the probability that the trait will be endorsed. *Journal of Applied Psychology*, 37, 90-93.
- Iwawaki, S., Fukuhara, M., and Hidano, T. 1966 Probability of endorsement of items in the Yatabe-Guilford Personality Inventory: Replication. *Psychological Reports*, 19, 249-250
- 大石明子 1964 個人特性評価における社会的要求性——矢田部・ギルフォード性格検査について——
心理学研究, 34, 295-298.
- 田中富士夫 1977 性格の測定——人格目録と受検態度—— 鈴木達也（編）心理学ゼミナール，福村出版 Pp.141-152.
- 辻岡美延 1965 新性格検査法—Y・G性格検査実施・応用・研究手引，竹井機器工業。